

二大都市の間で輝く暮らし良さが子育て世代に人気 産業振興×観光振興で目指す持続可能な自立都市!!

順調な歩みだからこそ必要な
「恵まれた環境」からの脱却

多くの都市が人口減少の抑制・克服に苦慮しつつある現況下、さまざまな要因や努力の積み重ねによって、人口を増やし続けている都市も一方にある。平成17(2005)年1月、福岡県北西部に位置する旧宗像郡福岡町ふくまちと同津屋崎町つやさきまちの2町の合併により、新市としての歩みを開始した福津市は、そうした都市の一つだ。

福津市は合併から7年後の平成24(2012)年以後、人口を少しずつ、着実に増やし続け、合併時の人口約5万7000人は、令和4年9月末時点で6万8502人にまで増えている。直近の10年間で約1万人、人口を増やしたことになるが、その背景には言うまでもなく、さまざまな要因(備わっていた資質)と共に、それらの要因を成果(人口増とその維持)

へつなげていくための、福津市自身の膨大な努力の積み重ねがあり、それは現在も続けられている。

現在、福岡県内には29の市があるが、その中でも福津市が人口増を持続(合計特殊出生率も全国平均超を維持)している最大の客観的要因(資質)は、全国に20市、九州に3市しかない政令指定都市のうちの2市、福岡市と北九州市の間に位置しているという地理的特質だろう。しかも、福岡市の中心部からは25km圏内、北九州市中心部からは40km圏内と、共に至近距離にある。

交通網も充実している。市域東西をJR鹿児島本線が貫き、市域西部の海岸線に沿う形で国道495号(北九州市若松区〜福岡市東区)が走っているほか、九州の主要部を縦断する九州自動車道(北九州市〜福岡市〜久留米市〜熊本市〜鹿児島市)の若宮IC(宮若市)、古賀IC(古賀市)も至近だ。そのため、JR博多駅(福岡市)からJR鹿児島本線(快

はらさきともひと
原崎智市長
福津市



(速)で福岡駅(福津市の中心)までは約25分、JR小倉駅(北九州市)から福岡駅までは快速で約45分。さらに福岡空港から福津市中心部までは車で約40分、北九州空港からも同様に約70分で着くなど、ベッドタウンとしての優れた資質を形成する、非常に恵まれた地理的(交通)環境を有している。その上、市域西部は玄海国定公園の美しい海岸線に縁取られており、全長22kmに及ぶ白砂青松の海岸線沿いには「九州の湘南」と称される、ファッショナブルなまち並みが随所に形成されている。



福津市の全長22kmの海岸線は「九州の湘南」として大人気



福津市の多様な魅力を凝縮!! イオンモールの前に立つ「ふくつ海岸」案内看板



花のまち・福津を代表するトルコギキョウ



津屋崎海岸に建つグランピング・ドームはガラス張りの壁から海が一望できる

「その基盤となったのは、合併からの約7年間(平成17〜平成24年)にわたって先達が実施した、福岡県東土地区画整理事業の完了およびそれに付随しての大型商業施設(イオンモール福津)の開業、その他の進出

そうした新たなまち並みが、近世以降に形成された旧津屋崎町エリアのモダンな交易都市と伝統的な漁師町が混交した独特な雰囲気や、創建1700年以上とされる宮地嶽神社(みやじがけじんじゃ)および平成29(2017)年に認定された世界遺産「神宿る島/宗像・沖ノ島と関連遺産群」の構成資産の一つ「新原・奴山古墳群」など、太古に形成された景観と当たり前のように同居している様子は、非常にダイナミックだ。



同時に福津市は合併以来、積極的な新市のまちづくり(建設)計画の遂行を通して、こうした数々の優れた地域資源や財産を、より一層生かすような、独自の都市的環境を自ら創り上げてきた。

企業による雇用の場の創出、J-R福岡駅の新駅舎開業、公共下水道の整備事業竣工による生活環境の向上など、地域活性化にまつわる各種の施策・事業でした。

福岡市と北九州市のどちらにも近い福岡市は現在、福岡都市広域圏(10市7町)に組み込まれています。実際、福津市から福岡市に通勤する市民は非常に多く、福津市はいろいろな意味で、福岡市の文化・経済圏の一員という気分が強いと言えます。

しかし、合併前の旧福岡町は、昭和36(1961)年に北九州市(※当時は八幡市)に立地する八幡製鐵(現日本製鐵)の社員住宅として、原町団地が造成されたことにより、人口が急増しました。

福岡地区にはその後も、東福岡団地(県住宅供給公社)、若木台団地(東急不動産)、光陽台団地(西武不動産)などの大型住宅団地が建



300年以上の歴史を誇る津屋崎祇園山笠



日本一の太鼓連繩(しめなわ)のほか、日本一の太鼓・大鈴も有する
福津の宮地嶽神社は全国に点在する宮地嶽神社の総本山

物にも依存しすぎない、自立した都市としての、福津市の持続可能な未来、具体的には、人々に選んでいただき続ける、少子高齢化を招かない都市への、確固たる足掛かりを創ることと自認しています。端的に言えば、『環境に恵まれた都市』から『恵まれた環境を生かして自ら稼ぐ都市』への脱却が、私の主要テーマなのです』

そう語るのは、原崎智仁福津市長だ。原崎市長は福津市(旧福岡町)の出身。大学卒業後、平成15(2003)年から社会福祉法人の職員となり、平成23年1月から平成29年1月までの福津市議会議員としての活動を経て、同年2月に行われた市長選に出馬し、当選。令和4年の現在、2期6年目を迎えている。

求められるのは20年先30年先を 見据えたまちづくりの礎

旧津屋崎町のまちづくりが始まったのは、関ヶ原の戦い(慶長5/1600年)の恩賞により、豊前国(主に現大分県)を領していた戦国武将・黒田長政が、徳川家康から筑前(主に現福岡県)の領主に移封された直後ということから、400年以上も前のことになる。

また、近世に塩田開発が盛んになるとともに、産出される塩を中心に各種の交易が行われるようになり、津屋崎は玄界灘の交易都市として名をはせる。そのにぎわいは「津屋崎千軒」と称されるほどで、当時の名残は白壁



子どもたちがマリンスポーツの魅力を学ぶ「学校海洋体験」の模様(アカウミガメの産卵地からも近い福津市勝浦浜海洋スポーツセンター)

黒瓦の伝統的なまち並みや、700年以上続く《博多祇園山笠》の流れをくみ、18世紀初頭に始まった伝統行事《津屋崎祇園山笠》(福津市無形文化財)などにも見て取れる。

現在の津屋崎地区は、伝統的なまち並みが保存されている分、新たな開発はされにくい。その反面、福岡都市広域圏では珍しい農水産業に好適な自然環境が保たれ、後継者不足という悩みを抱えつつも、福津市の第一次産業を今もしっかりと支えている。

一方の福岡地区は、江戸時代には福岡浦と称される漁村だったが、明治22(1889)年に門司港駅から博多経由、熊本・鹿児島にまで至る鹿児島本線が部分開業し、翌明治23(1890)年に、福岡駅が設置されて以降、

設され、ベッドタウンとして成長していきませんが、それは八幡製鐵と、かつては八幡製鐵の企業城下町とされた北九州市との関係(絆)の深さが主因となつての発展と言えます。そういう意味合いにおいて、福岡市と北九州市の双方と至近距離にあるという絶妙な位置取りは、福津市の持つ都市としてのまさに重要な資質です。合併後しばらくしてから、そうした資質と土地区画整理事業などの効果で、着実に人口増を維持してきた側面があります。しかし、周知のように人口減少の潮流は、都市としての資質の高さや、土地開発などの建設事業の成果だけで乗り越えられないような、単純な問題ではありません。福津市の3代目市長に就任した私の責務は、そうした地理的な優位性や、先達が構築してくださった都市としての基盤の上に、何

福津市

(福岡県)

市 政 ル ポ



福津市には進出企業による実験的な事業も目立つ／店舗と住宅が一体になった新感覚の「商業一体賃貸住宅」

近代的なまち並みを形成していく。

高度経済成長時代が始まる1960年代以降、北九州市(旧八幡市)に立地する八幡製鐵の成長とともに、ベッドタウンとして拡充していくわけだが、大型住宅団地の開発が一段落した平成12(2000)年ごろから、旧福岡町・津屋崎町を合わせた福津市エリアの人口の伸びが停滞し始め、平成17年の合併を挟んで平成23年ごろまでは横ばい、ないし漸減傾向が続くことになる。しかし、冒頭に述べたように、翌平成24年以降は、合併から7年間にわたる新市のまちづくりなどを契機に、再び人口が増加、現在に至っている。

試みに、人口の増え始めた平成24年以降に発表された「住みよさランキング」など、出版社やデベロッパなどが主催する各種「都市別人気ランキング」を見ると、平成24年には福岡県で第2位(東洋経済新報社・住みよさランキング)に位置付けられ、令和4年に至るまで途切れることなく、九州地区、福岡県、時には全国の都市別ランキングでも上位に位置付けられているのを確認できる。

その間の平成27(2015)年には、人口が6万人台に達した。翌平成28(2016)年には、合併以来、旧福岡庁舎・津屋崎庁舎の分

庁方式で行われていた市役所機能を、福岡庁舎に集約するなど一体化を推進。津屋崎地区には、市民サービスを行う津屋崎行政センターが、新たに設置された。

さらに、原崎市長が就任した平成29年には、旧津屋崎町の庁舎が図書館や資料館(図書館1階に設置された世界遺産『新原・奴山古墳群』の模型展示・資料室)、最大506席のカメリアホールを有する文化会館、カフェ、誘致企業のサテライトオフィス、市内での起業を目指す人たちのためのインキュベーションルームなどが入居する複合文化施設《カメラリアステージ》へとリニューアルされ、公共施設の大まかな統廃合は取りあえず一段落した。

「紆余曲折はあったものの、特に福岡駅東地区の開発が竣工し、人口が再び増え始めた平成24年ごろからの、そうした福津市の歩みは、はた目には恐らく順調すぎるほど順調に映ることでしょう。

実際、市役所内でも、そのような雰囲気や支配的でした。半面、いつかは福津市にも来ることが確実な人口減少への対応、働き盛り世代の

減少による税収の減少や超高齢化社会到来への対応、さらに現時点での人口増とともに急がれる子育て支援などについては、有効な具体策がなかなか実施されない状況が続きました。

20年先、30年先を見据え、いつか来る人口減少にも対応できるビジョンを構築した上で、必要な施策を適宜打ち出していくのでなければ、現在せっかく続いている人口増の効果を、持続可能な近未来のまちづくりの基盤へと引き継いでいくことが、できなくなる恐れがあります。平成23年に福津市議会議員となった私には、新市の基盤が少しずつ構築され始め、人口増とともに、せっかく上昇機運に乗り始めた福津市政のそうした停滞状況に対し、年を追うごとに強い危機感を覚えざるを得ませんでした(原崎市長)



移住者夫妻が経営するオシャレなカフェから見える景色



津屋崎の歴史資料などが展示されている津屋崎千軒民俗館「藍の家」(国登録有形文化財)は築120年の元染物屋



福津市の名産・みずみずしさで知られるカリフラワー

かくして市長選への出馬を決意した原崎市長による、就任(平成29年3月)後の動きは、非常にエネルギーシユなものだった。

まずは懸案になっていた「第二次総合計画」の策定を、市民の意見を徹底的に反映した形で仕切り直した。行財政改革においても、内部監査だけでなく、市民と共に不断に検証できるようなシステムを含む、新たなプランに構築し直した。

そうした市政の根幹をつかさどる各種計画の見直し、強化とともに、地域活性化の基盤となる「福津市まち・ひと・しごと創生総合戦略」(平成28年3月策定)を平成29年9月に改訂。前出の市長談話にある「恵まれた環境を生かして自ら稼ぐ都市」の構築を推進する機関として、平成30年、《農水産業×観光》を戦略的な取り組みに掲げる地域商社「一般社団法人福津いいざい」を設立した。

共働と農水産業×観光振興で目指す《稼ぐ都市》の基盤構築

『福津いいざい』は、農水産品を主力とした《食》をテーマに、農水産物やその加工品、6次産品および観光資源を価値ある《知財》として戦略的に情報発信するとともに、販路の開拓、高付加価値化に伴う認知向上へと結び



地元・玄界灘産の新鮮な魚介はまさに地域財産

付け、観光振興の原動力にする。ひいては、総合的なローカルブランディングにまで結び付けるような取り組みを行う目的を持って、設立しました(原崎市長)

例えば福津市のふるさと納税額は、平成30年度において一気に前年度比約4.5倍に増加し、以後、年を追うごとに約3倍、約2倍、昨年度においては1.3倍強(いずれも前年度比)と順調に伸びている。これは「平成30年度以降、福津いいざいが商品のセレクトからブランディングに至るまで関わるようになったから」(原崎市長)だ。

その過程の令和3年9月1日には、令和2年から準備を本格化させていた《一般社団法人ひかりの道DMO福津》(代表者は宮地嶽神



津屋崎ヨットハーバーは風光明媚な玄界灘の景色を眺めながら出航でき、大小約180隻を保管できる

社宮司の浄見讓氏)の設立登記を、福津観光協会と連携して実施している。

「『地域の稼ぐ力を引き出す観光地域づくり法人』としてのDMOの取り組みに対しては、補助金を適宜交付するとともに、福津の魅力を生かしながら、持続可能な観光のまちを実現するため、これからさらに連携を強めていきたいと考えています」(原崎市長)

同様に原崎市長が現在、自ら稼ぐ都市としての新たなシステム構築の原動力として、実現を最も強く願っている目標の一つは、「商用にも観光用にも使える、しかるべき規模のホテル誘致」だという。

「コロナ禍以前の福津市には、年間600万人近くの観光客がいましたが、そのほとん

福津市

(福岡県)

市 政 ル ボ



干潮で穏やかな天候の日だけ見られる「かがみの海」

どは日帰り客でした。しかし、福津市には数多くの魅力的な観光資源があります。

最近では、潮が引いた晴天かつ穏やかな天候の日に見られる《かがみの海》や、年に2回だけ夕日が参道を真っすぐ照らし出す宮地嶽神社からの風景（光の道）が『インスタ映える風景』として、全国的な人気を博するようにもなっています。

宿泊施設が充実すれば、食の魅力など、数々の地域資源をゆつくり楽しんでいただくことができます。優れた産物が豊富にあるのに、後継者不足に悩まされがちな農水産業の振興にもつながり、自ら稼ぐ都市としての基盤もより一層整っていくはず」（原崎市長）

以上述べてきたような多様な計画、施策や事業などについては全て「市民の意見を常に反映しながら進めてきましたし、その姿勢は福津市政の基本精神として今後も厳格に守っていきたい」とも語る原崎市長は、本年7月1日に「福津市ボランティアセンター」を改組し、市民活動の拠点として「福津市未来共創センター（キッカケラボ）」を、中央公民館内に設置した。

キッカケラボは「市民活動を新たに始めた市民が、市民共働参画の第一歩を踏み出すための『きっかけの場』になるように」（原崎市

長）との願いが込められた命名だ。令和元年7月に《SDGs 未来都市》に選ばれた福津市には、各地区の市民による「郷づくり（まちづくり）事業」などを通じ、地域活動、市民活動に熱心な市民が多い。さらに、二つの会議室や情報コーナー、印刷コーナーなどを備えた拠点施設・キッカケラボの設置は、新たに市民活動に参画する市民の「やる気」を促す効果と共に、近年に新住民になった人々にとっても、地域を知り、地域に深く溶け込んでいくための「きっかけの場」になるのではないだろうか。

また、福津市は現在、市内に立地する鹿児島本線のもう一つの駅「東福岡駅」周辺地域の「にぎわい再生計画」を推進している。福岡市寄りの福岡駅周辺は、合併直後の平成17年から実施した土地区画整理事業の成功で、人口増の基盤を作った。それに対し、北九州市寄りの東福岡駅周辺は、旧福岡町時代に造成された大型団地が集中しており、団地の老朽化などに伴ってにぎわいが低下しつつあった。東福岡駅周辺の「にぎわい再生計画」は本年度中に、にぎわい再生を担う民間事業者を決定する段階だが、近未来に向けた、新たな発展のサプリメントとして、今後の推移が注目される。

さらに津屋崎地域につい



玄界灘に沈む夕日が宮地嶽神社の参道を照らす「光の道」が見られるのは年に2回だけ

ては、津屋崎千軒を中心とした観光の活性化に向けて、エリア内にある公共施設などを官民連携手法で活用するための方策についても、調査・研究を重ねている。これについても、今後の展開が非常に楽しみだ。

さて、合併時に公募決定した「福津」の市名には「幸福や多くの人が集まる津（港・場所）でありたい」との意味が込められている。

良好な自然環境の指標とされ、長寿の代名詞でもあるアカウミガメが毎年のように産卵に帰ってくる福津市は、まさに多様な幸福が集まってくる「津」の条件がそろっている。恵まれた環境に甘んじることなく、市民共働を基盤に、いろいろな意味で自立し、自ら稼ぐ都市としての発展を目指す原崎市長の主要テーマは、「市名に込められた願いを着実に実現していくこと」にある、とも言えそうだ。

（取材・文〓遠藤隆／取材日〓令和4年7月12日）